

◇編集後記◇

副委員長として1年目の西田でございます。何かと不慣れで、笹島委員長と事務局とはいろいろご迷惑をかけ、ご指導いただきながら任にあたっております。

54巻1号として新年の挨拶や抱負等を述べるべきところでございますが、昨年3月の東日本大震災以来、大きな爪痕、復興課題を残したまま新年を迎えられた被災者の方々は多く、未だ仮設住宅で不自由な生活を余儀なくされている実態であります。

1000年に一度といわれる未曾有の大災害に見舞われた東日本、多くの人々の、いままでの価値観を180度変えることとなりました。当たり前なことと享受してきた平穏な生活、当たり前だと思ってきた住まいや水、電気、空気など実は大変なことであることに気づかされる昨年でした。大変な状況で気付かされたもう一つ、家族や近隣・地域のつながりが再認識され、2011年はその世相を表す漢字として「絆」が選ばれました。

2012年は世界の国々でリーダーが変わる年だと報じておりました。中東アラブ諸国では次々と独裁政権が幕を閉じ民主化の方向へと動きはじめております。世界的規模で経済の低迷が続く中、この閉塞感を打ち破らんと様々な政策や仕組みづくりが模索されています。

Globalizationの名のもとに経済をはじめ世界の様々な

仕組み・制度が変化し、日本においてもその波は避けられない状況で迫って来ております。かつては製造業がGDP(国民総生産)の主流を占めていたのが、今は金融商品に取って変わってきており、製造業が苦境に立たされていると某テレビ番組で報じておりました。このような中で日本は世界の中でどう生き残っていくのか、日本経済はグローバル化の波をどう乗り越え、何を目指し、何をなすべきか、大所高所に立って考え、身近なところ、自分にできるところから活性化に繋がる行動をせねばならないと演者も述べておりましたがまさに同感です。政治家や経営者だけの問題ではないということです。

経済危機、大災害の中にいる今、私たち一人一人が何を考え、何をなすべきか、と考えた時に“Think globally, act locally”この言葉がすべてに通じるのではと思いました。

産業保健の学術雑誌として、これらの諸問題とどのように向き合い、どのような情報を発信していくかが課されていると思います。緊急時、短期的、中期的、長期的視野に立ち、将来に亘って求められる叡智を集積していかなければならないのではと思います。

(西田和子)

「産業衛生学雑誌」編集委員会

委員長：笹島 茂 (三重大)

副委員長：樺田尚樹 (国立保健医療科学院)、杉森裕樹 (大東文化大)、高尾総司 (岡山大)、
玉腰暁子 (愛知医大)、那須民江 (名古屋大)、西田和子 (久留米大)、平工雄介 (三重大)、
藤野善久 (産業医大)、毛利一平 (労働科学研)、八谷 寛 (名古屋大)

石竹達也 (久留米大)、井上和男 (帝京大)、岩崎健二 (独法労働安全衛生総研)、植嶋一宗 (三重大)、梅津美香 (岐阜県立看護大)、小笹晃太郎 (放射線影響研)、萱場一則 (埼玉県立大)、川口陽子 (東京医歯大)、熊谷信二 (産業医大)、黒沢洋一 (鳥取大)、近藤尚己 (山梨大)、酒井一博 (労働科学研)、佐々木美奈子 (東京医療保健大)、菅沼成文 (高知大)、田中昭代 (九州大)、土井由利子 (国立保健医療科学院)、中尾陸宏 (帝京大)、中村裕之 (金沢大)、馬場園明 (九州大)、原田浩二 (京都大)、東 尚弘 (東京大)、福島哲仁 (福島県立医大)、堀口兵剛 (秋田大)、丸山総一郎 (神戸親和女子大)、三木明子 (筑波大)、三宅達郎 (大阪歯大)、村田勝敬 (秋田大)、八幡勝也 (産業医大)、大和 浩 (産業医大)、吉田貴彦 (旭川医大)、渡邊博且 (産業医大)

〒160-0022 東京都新宿区新宿1丁目29番地8 公衆衛生ビル4階

電話 03-3356-1536 ファックス 03-5362-3746 振替 東京 00100-7-133495 番